「土をつくる、たい肥をつくる」

–津山市久米堆肥処理施設「ゆうきの丘」–

美作県民局畜産第１班

「土づくりへの思いが、たい肥づくりにつながっています。」と話すのは、津山市久米堆肥処理施設「ゆうきの丘」の冨山勝さん。

ローダーの操縦は、冨山さん。

「ゆうきの丘」は、稼働から約 12 年。環境問題の解消を図るとともに、良質なたい肥を利用して高品質な農産物を生産し、環境保全型農業を推進するために建設されました。冨山さんは、この施設の建設計画から関わり、作物の生産はもとより、施設/機械の勉強もしたそうです。「農産物の生産にはどういうたい肥が良いのか、どういうものが望まれるのか。」知識を積み上げた結果、たどり着いたのが、もみ殻を使った牛糞たい肥。根本は［ドベネックの桶］です。」と話されます。

事務所入口には「ドベネックの桶」の文字が。

良質な農産物生産のために、土づくりへの思いを込めたたい肥「ゆうき」。土づくりのためには、たい肥は継続して使ってもらうことが基本。たい肥（13kg 袋が 350 円）は、広域に販売するのではなく、地元で長く使用してもらいたいと、ＪＡや道の駅「久米の里」など久米地域を中心に販売されています。バラたい肥 5,500 円/t もあります。旧久米町内には配達、散布（別途料金）もしてくれます。

現在、久米地域では久米青空市生産組合（有機野菜を出荷）の人たちが「ゆうき」を土づくりに使っており、その土で育てた有機野菜は道の駅「久米の里」で販売されています。売れ行き好調！

最近では、「ゆうきの丘」にたい肥のことについて、相談に来る人もいるということです。

もみ殻の確保や施設の運営など多々問題もあるようですが…。

お近くの方は、是非、富山さんの「ドベネックの桶」の話を聞きに、ゆうきの丘を訪ねてみてはどうでしょう。遠くの方は、ドライブがてら、道の駅「久米の里」に足を運んでみては？

こちらは、製造担当の岡さん。

施設のマスコットです。